短信
大島弥生/アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル 11(2019)64-72

人文社会科学系の資料分析型論文の指導のための試案

大島弥生

要旨

大学・大学院留学生の過半数を占める人文社会科学系の論文の読解・作成の指導において、実際の論文に表れる典型的な表現例（以下、用例と呼ぶ）を用いた説明は、これまで十分に行われてきたとは言いがたい。本稿では、《資料分析型》論文における資料の引用と解釈の部分に頻出する談話展開と語彙・表現とに着目し、作文や読解の練習のための用例提示の試案と、練習の流れの試案を示す。人文社会科学系における談話展開や語彙の例示に関して、過度な単純化は避けられるべきではあるが、学習者が自己の専門分野での論文の特徴を把握するための手がかりとしての有用性があることを主張する。

キーワード

資料分析型論文、論文作成、論文読解、引用、解釈

1. 本稿での提案の背景

1.1 人文社会科学系の資料分析型論文における談話展開と語彙・表現の指導の必要性

JASSO（独立行政法人日本学生支援機構）外国人留学生在籍状況調査結果の近年の傾向を見ると、大学・大学院留学生の約半数を人文科学系が占め（平成 29 年度は 46.5%）、社会科学系がこれに次いでいる（同 25.3%）ことがわかる。人文・社会科学系は、このように対象留学生数が多いだけでなく、論文執筆における日本語使用の傾向も相対的に高い。しかも、人文・社会科学系では雑誌論文の 1 編あたりの頁数も概して長いことから、論文の中で使われる談話展開の構造や構文が複雑であること、例文の抽出が困難であることが指摘されてきた。一方、これまで論文の構造や文型のモデルは理工系に多い実験・調査に基づくタイプのもの（後述する《実験／調査型》論文、すなわち IMRAD 型または IMRD 型――Introduction、 Materials and Methods、 Results and Discussion の略――と呼ばれる論文）からの抽出と例示が積み重ねられてきたといえる。しかしながら、これらの分野では、特に大学院教育を中心に、論文執筆は英語で行う傾向が強まってきている。このような状況下で、人文社会科学系で頻用される談話展開や語彙・表現（用例）を提示して練習を行えるような教材化のニーズは高まっている。

1.2 人文社会科学系の資料分析型論文に関する研究の展開

人文社会科学系の論文作成支援の分野では、当初、さまざまな学問分野の頻出語彙の抽出が主流であった。その後、ジャンル分析を用いた序論の談話展開の分析が広がり、大島（2009）では人文系論文の論証部分の談話展開（たとえば、歴史学の「事例」「文献資料」を研究対象としていることを明記した論文において、歴史上の人物や組織の行動の記録から特定の事象の部分を取り上げて引用し、それに対して【評価的描写】【推論・解釈】を加えていく流れ）における【評価的描写】の部分（たとえば「～は有効／困難であった」など、

先に資料から引用した内容について論文筆者の評価的見解を述べている部分)の重要性が指摘された。

さらに、佐藤ら（2013）において、人文科学、社会科学、工学の 3 領域 9 分野 14 学会誌合計 270 論文の分野横断的な構造分析を通じて《実験／調査型》《資料分析型》、《理論型》、《データ複合型》の 4 つの基本類型とその下位分類としての 11 の構造型が抽出されたことを契機に、人文社会科学系の中心類型である《資料分析型》の研究が多くなされるようになった。なお、本稿で《資料分析型》論文とは、引用した一次資料データの分析を通じて考察を進めるという構造類型のこと（佐藤ら 2013、p.89）を指す。たとえば、歴史学の論文における、同時代の日記や言行録などの一次資料から発言や行動を引用し、それに対する論文筆者の解釈を徐々に加え、小括的・総括的解釈から結論にいたる流れを導く型の論文がこれに当たる。

さらに、《資料分析型》論文で重要な位置を占める資料（歴史的な史料を含）の引用から解釈に至る連続体と、その下位分類の指摘が山本・二通（2015）においてなされ、以下の A～D 文の存在が示された。

・A 中立的引用文（「という」「と述べる」を用いた直接・間接引用）
・B 解釈的引用文（「という」「と述べる」以外の解釈的引用の動詞・動名詞を用いた文、「と記す」等）
・C 引用解釈的叙述文（「を説明する」など主体の動作への解釈を含む、引用標識「ト」を用いずに筆者の解釈を通じて叙述する文）
・D 解釈文（資料の内容に対する筆者の解釈のみを示す文）

また、これらの文の働きについて、10 編の《資料分析型》論文の実例を紹介しながら体系的に説明がなされた。以来、引用と解釈をめぐる研究が相次いで発表されている。

たとえば、大島（2016）では、農業経済および漁業経済分野の統計資料および事例の分析を含む《データ複合型》の論文 10 編を対象に、統計資料および調査事例に対する解釈を行っている表現の構造と文体的特徴を分析している。その結果、資料の提示・その考察・調査結果の提示・その考察の 4 つの構成要素が観察され、全構成要素に解釈の表現が含まれていたことを指摘している。

生天目・大島（2019）では歴史学・国際政治学・地域研究分野の《資料分析型》論文 15 編（各分野 5 編）を対象に、論文の構成要素を分類・抽出し、歴史史料の引用に基づいた叙述・解釈の表現について、山本・二通（2015）と同様に、A の「ト」を用いた中立的引用の割合が非常に少なく、C の引用解釈的叙述文（「ト」を用いない引用）や D の解釈文が主体となることを指摘している。

しかしながら、これらの研究では、対象とした論文の一部分を抽出して少数の例を示すにとどまり、学習者が類例として参照するためには、用例が十分とは言えない。そこで本稿では、《資料分析型》論文における資料の引用と解釈の部分に頻出する談話展開と語彙とに着目し、作文や読解の練習のための用例提示の試案の一部を第 2 章に示し、第 3 章では用例をもとに練習する授業案を示した。

2.　人文社会科学系の資料分析型論文に頻出する用例の提示

2.1　用例の抽出方法

筆者らは、これまで、歴史学・政治学・地域研究などの人文社会科学系論文を収集し、談話展開や表現使用の特徴を探ってきた。その際には、当該分野の代表的な 3 学会誌からランダムに各 5 編を抜き出し、それを山本・二通（2015）の A〜D 文とその下位分類を参考にしつつコーディングを付した後、分類結果の中で用いられていた動詞・動名詞、語彙・表現等をリストアップし、それをもとに分野の特徴を記述してきた。したがって、2.2 で示す本稿での用例提示には、山本・二通（2015）において既出の下位分類と重なる項目や語彙もありつつ、同時に今回対象とした論文をもとに抽出した語彙・表現もあり、必ずしも一対一対応の分類ではない。

本稿においては、それらの特徴的記述の中から相対的に頻度が高く、筆者らが典型的とみなした談話展開・語彙・表現等を取り出し、学習者が応用しやすいように簡略化した上で、文型部分以外を下線部や［　］によって抽象化して示した（3 章の表 1 参照、たとえばさまざまな事件・出来事・言動等の固有名詞が入る箇所を「事例名」と示すなどして抽象化した）。すなわち、本稿は分類の新規性の追究ではなく、分野に特徴的と思われる用例の提示自体を目的としている。

なお、人文社会科学系の論文において、大きな構造上の流れとして全体的な分野の特徴はあるものの、文体や用語は大分野・小分野や研究アプローチによって異なり、絶対的な頻出文型として断言することはもとより不可能である。とはいえ、これまで論文作成支援の教材では示されていなかった語彙・表現を相対的に頻出する用例として示すことにより、学習のプロトタイプ的な手がかりとすることは可能であると考える。

2.2　用例の提示

以下では、資料（特に歴史的な史料）からある「事例」（登場人物の言動・出来事・集団の動向など各種あるが、表 1 では人物の言動を中心的に扱う）を論文中で論じる話題として取り上げて、導入的提示、人物等の言動の引用、それらの解釈、小括へと向かう談話展開を一つの典型的な例として示す。まず、図 1 において、導入⇒引用⇒解釈⇒小括というユニットを示す。それを詳細化した表 1 では、大きな流れを①のような丸数字で、抽象化可能な要素を下線部で、置き換え可能な部分を［　］で、頻出する語と表現を右欄での例示で、それぞれ示したものである。たとえば、表 1 冒頭の以下の用例であれば、具体的な固有名詞などで論文に書かれる話題を「取り上げる話題」として下線部で抽象化した語彙として示し、近似の意味を持つ語を［まず／つぎに／これに対して］のように［　］に入れて示した。

・［まず／つぎに／これに対して］、［取り上げる話題の例／それを裏付ける動向・事例］として、史料名［を見てみよう／を取り上げる／に着目する／が挙げられる］。

表中の①導入のような丸数字の流れはあくまでも比較的多く現れる例であり、その一部だけが使われたり、異なる順序で現れたりすることも多い。一文の中に複文の前件と後件などの形で 2 種以上の流れが現れる場合もある。

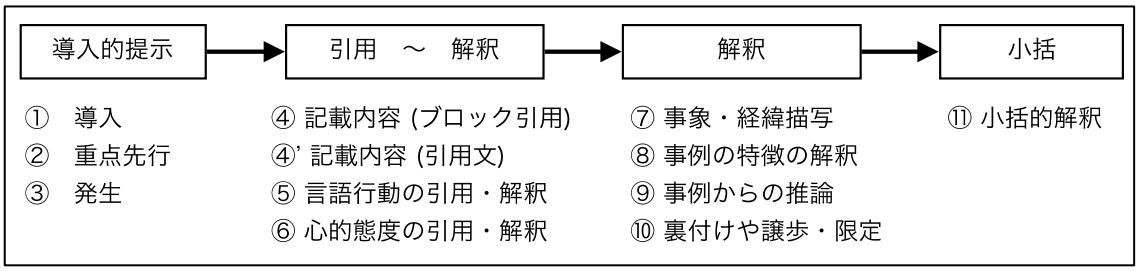

図 1　導入・引用・解釈・小括の談話展開の流れ

表 1　事例の導入・引用・解釈・小括を中心とした談話展開の例

流れ	頻出する展開と文型	頻出する語と表現
① 導入 論文中の次の展開を示す メタ言語	・[まず／つぎに／これに対して]、[論文中で取り上げる話題の例／それを裏付ける動向・事例] として、史料名[を見てみよう／を取り上げる／に着目する／が挙げられる]。 ・次の史料名は、[～の／～のよくわかる]　[好例／一例／事例／顕著な例]　である。	取り上げに関する頻出表現： 挙げる、掲げる、取り上げる、指摘・提示する
② 重点先行 特徴的行為や事例を取り上げる、または先に解釈内容を示す	・[第一に／まず] 取り上げる特徴的行為が　しばしば行われるようになる。 ・[まず／特に][注目したい／重要な]のが、事例名である。 ・[これ以外にも／この他]、取り上げる特徴的以外の例外的行為[が見受けられる／もある／が(～の一環として) 行われる場合もある／が導入される場合もある]。 ・[つぎの／以下の] 事例名を見ると、取り上げる行為が象徴的意味 [を持つことが／を有していたことが／である] と、[理解できる／わかる。]	
③ 発生 事柄の発生時の状況や解釈の前提、意味を説明	・時期・状況等に [おいて／際して]、対象となる事象・事例が[発生した／生じた／設立された／～な展開を見せた]。 ・時期・状況等において、対象となる事象・事例は、[重要な意味を／～性]を[持っている／有している／～ことになる]。 ・対象となる事象・事例は、解釈として　無視できない。 ・(そもそも) 対象とは、　本来の意味・役割等を[意味していた／目指していた／意図したものであった]。	発生に関する頻出表現： 決定・実施・開催・設置・開始・設立・提出・発生する

	・場所・機関では　時期に　分析対象となる出来事・事例が　[行われて／実施され／導入され]、　集団・地域に　[普及していた／流行していた／受け入れられていた／～影響をもたらしていた]（ことが　史料該当箇所から[うかがえる／見て取れる]。）	
④ 記載内容 ブロック引用を用いた記載内容の紹介	・史料名／言語行動名は［以下のとおり／以下のようなもの］である。 ・出来事・事例について、史料名は、次のように[記録して／記載して／記述して／明記して／記して／書いて／述べて]いる。 ＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊ ＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊	記載に関する頻出表現： 記録・言及・強調・明記・作成・提示・紹介・執筆・叙述・記述する、書く、示す、記す、見られる、(内容)である等
④' 記載内容 引用文を用いた記載内容の紹介	・史料名／人物によると、引用内容[であった／した]という。 ・史料名には、引用内容と[ある／書いてある／書かれている／記されている／記載されている]。 ・なお、記載のない事象・内容は　[記録されて／示されて]いない。	
⑤ 言語行動 人物の発言の直接引用・間接引用	・人物は、(場面において)「直接引用」と[述べた／述べる]。 ・人物は、(場面において) 間接引用の内容（名詞句）を[述べた／述べる]。 ・(場面において) 間接引用の内容（名詞句）が[表明された／報告されている]。 ・(場面において) 間接引用の内容（言語行動を表す名詞句）が[なされた／行われている]。	言語行動に関する頻出表現： 述べる、語る、論じる、伝える、説く、示す、認める、尋ねる、明かす、呼びかける、提案・主張・報告・表明・言及・発表・強調・表現・説明・通告・証言する等
⑥ 心的態度 言語行動を描写しながら、解釈的引用や解釈を示す	・人物は、ここで、「直接引用」［と述べ／と語り］、「直接引用」／間接引用［との／という］［見解／理想／決意／不満･･･］を語り、心的態度・心情・意図・思考を［表明した／あらわにした］。 ・人物は　～で　「引用内容」［と／を］［訴える／説く／唱える］など、～に（対して）心的態度　［であった／を見せた］。 ・人物・機関は　～を［優先し／重要視し／～とみなし］ており、～に対しては［慎重／冷淡／批判的／積極的／消極的］［であった／な態度を見せた／な	心的態度に関する頻出表現： 脅す、疑う、怒る、指摘・反論・要望・批判・主張・非難する、という／との指摘・反論・要望・批判・意見・非難、疑い・怒り

	姿勢を取った]。 ・人物・機関は　～に対して［不満／不安／抵抗感／危機感］を［有して／抱いて］いた。 ・人物の～での［発言／宣言／呼びかけ／見解］は、（～という［観点／面］から）認識された内容［として／（した）ものと］～に［受けとめられた／認識された／伝わった］。 ・（～に協力／反対する立場の）人物 A にとって（～の［担い手／支え］である人物 B の［支持／活動／協力］は、［有力な／重要な］～の［根拠／力］となった。 ・（［とはいえ／ただし］、）人物・機関が　行為　することは、対象　［に困難をもたらした／が～化することにつながった］。	
⑦ 事象描写 経緯描写 出来事の経緯や、その後の展開を示す	・（接続詞、）人物が　行為を　［した／行った］。その後、行為を　行った。 ・（接続詞、）事象が　［あった／～されていた］。 ・［以降／その後］、人物・機関 A は　（出来事を［契機に／きっかけに］）　対象を　［急速に／次第に］［拡大して／普及させて／推進して］いく。 ・人物・機関 A は　～に　なっていった。 ・［一方／他方／また］、他の人物・機関 B は、（A への　［対抗策／対案／対応］として、（手段を［用い／経て］、［方向性／別側面］　［へと導いて／へ向かって／を志向して／としての性格を強めて］いく。	事象や経緯の描写に関する頻出表現：～［状態/立場］であった、～［可能性/恐れ/問題/必要］があった、～［動き/要請］が存在した、～を余儀なくされた
⑧ 事例の 特徴の 解釈 事例の記述から着目した点を対比的に示す	・注目すべきは、事例の記述の特徴的内容　ことであろう。 ・この～は、人物・機関［にとって/において］解釈内容［であった／ではなかった］。 ・［これ／このこと］は、解釈内容を［示して／示唆して／表して］いる。 ・この特徴的事実（こそ）が、（他ならぬ）解釈内容を［示して／示唆して／表して／物語って／象徴して］いる。 ・事例の記述の特徴的内容は、～や～などの［点で／面で］、比較対象事例と［相違がある／異なっている］。 ・（［しかし／一方で／ただし］、）比較対象事例と［共	特徴に関する頻出表現： 相違：～と対局に置かれた、～には見出せない 類似：～と［符合／合致］する、～に近いものであった、軌を一にするものであった 関連：～と［関連／連動］している、～は～にとどまらなかった

	通している／一致している／近似している／似通っている］（面もある）。 ・比較対象事例が　特徴的内容 A であるのに対して、取り上げた事例は、（A というよりもむしろ）特徴的内容 B であることに　［注目したい／留意すべきであろう］。	
⑨ 事例からの推論 事例から推論として抽出できる点を示す	・史料名には引用内容［とある／記されている］ことから、推論の内容であった［と考えられる／ことが推測される／ことは疑いがない／ことは（ほぼ）間違いない］。 ・したがって、（仮定であるとすれば、）推論の内容［ことになる／ことになろう／ことが指摘できよう］。 ・（もし仮定であるとすれば、）推論の内容の可能性がある。 ・［この／同］事例から、抽出可能な特徴・性質の存在が　［うかがえる／判明する／看取できる］。	
⑩ 裏付けや譲歩・限定	・それは、別の事実　からも［うかがえる／からも裏付けられよう］。 ・それは、あくまでも　限定的解釈　にすぎない。	
⑪ 小括的解釈 一連の事例記述からの解釈をまとめる	・［以上の／このように／この］対象とする特徴・事柄が　小括的解釈・名づけ的な表現［であった／ことになった／に至った］［のである／のであろう／と言えよう／ことを示唆している／ことがわかる／と考えられる］。 ・叙述してきた状況からは、対象とする特徴・事柄の［変容／変化］を　［読み取る／見出す］ことができる。 ・叙述してきた状況［の／こそ］が、（まさに）状況の名付け的な表現（［であった（のである）／といえる／にほかならない］）。	小括に関する頻出表現： 確立した、形成された、成功した、図った、企図した、位置付けられた、帰結であった、産物であった、～に終わった

3.　用例を練習に用いる際の留意点と練習の流れの提案

3.1　用例を練習に用いる際の留意点

実際の使用にあたっては、個々の専門分野による異なりが存在することを考慮し、談話展開や語彙・表現の使用に関して、過度な単純化は避けなければならない。談話展開や語彙の用例は、あくまでも学習者が自己の専門分野での論文の特徴を把握するための手がかりとして使うように指示する必要がある。ここで示す用例は、あくまでも論文の展開を捉えるためのプロトタイプ的な手がかりであり、それをもとに自己の専門分野での談話展開

や頻出表現を探し出す作業から始めるのが、まだ執筆経験の少ない学習者にとって取り組みやすいだろう。各自が実際に論文執筆の際に特定の表現や語彙を使用するにあたり、それがその分野において適切か否かの最終的な判断は、やはりその分野の専門家（多くの場合は留学生の属する研究室等の指導教員など）に仰ぐことを勧めるべきであろう。

3.2　練習の流れの提案

前章に示した用例を日本語の授業で用いるとしたならば、前節の留意点を踏まえ、たとえば下記のような流れが考えられる。配分する時間は、日本語能力のみならず、その学習者が各自の分野の論文をどれほど読み慣れているかによって異なってくるだろう。

＜練習の流れ（試案）＞

①（必要であれば）論文とは何か、基本的に何が要求されるのかについての理解を確認する。

②人文社会科学系の《資料分析型》論文の中から、学習者全員にとって比較的読みやすい話題を取り上げ、談話展開もわかりやすいものをともに読み、大意を理解する（または大意を図などで示させる）。

③共有の論文の文中から、表 1 の用例のどれかに近い文型の文や、表 1 に例示されているものと同じ語彙・表現を探させ、マークさせる。

④各自の専門分野から、《資料分析型》論文を選ばせる。

⑤選んだ論文の文中から、③と同様に特徴的な用例や語彙を探させ、マークさせる。

⑥選んだ論文の大意・流れについて、口頭発表やレジュメで他者に伝える。

⑦各自の専門分野の特徴についての発見を、口頭発表やレジュメなどで他者に伝える。

⑧（必要であれば）これまでに学んだ・発見した用例や語彙を用いて文を作る。

このように、いきなり論文の一部の作成から取りかかるのではなく、まずは公開されている論文の読解から導入を始め、オーセンティックな用例や語彙に触れさせることが、論文作成能力の下地を作ることにつながると言える。

4.　まとめと今後の課題

以上、《資料分析型》論文における資料の引用と解釈の部分に頻出する談話展開と語彙・表現の用例、およびそれを用いて練習する際の留意点を述べてきた。もとより、これらの例だけではカバーできる範囲は一部分に過ぎず、対象論文が異なれば、抽出できる用例も増えてくるだろう。今後も他のバリエーションを継続的に収集・分類していきたい。

（大島弥生おおしまやよい・東京海洋大学・yayoi@kaiyodai.ac.jp）

付記・謝辞

本研究にあたり、学術研究基金助成金 15K02635 の助成を得た。また、本稿の作成において生天目知美氏の協力を得た。記して感謝の意を表したい。

注

1. JASSO 平成 29 年度外国人留学生在籍状況調査結果等を参照されたい。
   https://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_e/2017/index.html

参考文献

大島弥生（2009）「社会科学系の事例・史料にもとづく研究論文における論証の談話分析」『専門日本語教育研究』11，15-22.

大島弥生・佐藤勢紀子・因京子・山本富美子・二通信子（2010）「学術論文の導入部分における展開の型の分野横断的比較研究」『専門日本語教育研究』12，27-34.

大島弥生（2016）「データ複合型論文における統計資料および事例の解釈部分の構造と表現―農業経済・漁業経済分野の論文を例に」『専門日本語教育研究』18，29-36.

佐藤勢紀子・大島弥生・二通信子・山本富美子・因京子・山路奈保子（2013）「学術論文の構造型とその分布：人文科学・社会科学・工学 270 論文を対象に」『日本語教育』154，85-99.

生天目知美・大島弥生（2019）「資料分析型論文の史料引用における引用・解釈表現の特徴―歴史学／国際政治学／地域研究を対象に―」『専門日本語教育研究』20，19-27.

山本富美子・二通信子（2015）「論文の引用・解釈構造―人文・社会科学系論文指導のための基礎的研究」『日本語教育』160，94-109.